メディア教育研究　第４巻　第２号（2008）
Journal of Multimedia Aided Education Research 2008, Vol. 4, No. 2, 53－70

原著論文

プレゼンテーションの対話的構成過程に関する事例研究

鈴木　栄幸[1)2)]・加藤　浩[2)3)]

本論文では，Bakhtin, M.の対話の理論とLatour, B.のアクターネットワーク理論に基づいて，プレゼンテーションの構成過程を明らかにする。そのために，2つのプレゼンテーション準備場面（説得型プレゼンテーション，説明型プレゼンテーション）の観察をおこなった。観察の結果，次の知見が得られた。①プレゼンテーションの構成作業において，聴き手の声を想定した対話のシミュレーションが行われている，②聴き手の声を想定するためには，聴き手が埋め込まれている社会ネットワークを把握することが必要となる，③対話のシミュレーションの中では，Latourが指摘した連盟関係の構築は関心の翻訳といった社会的調整作業がなされる。これらの知見をプレゼンテーション教育に活かすのが今後の課題である。

キーワード
プレゼンテーション，対話理論，多声性，アクターネットワーク

１．はじめに

情報教育の重点は，コンピュータ操作スキルの習得から，コンピュータを利用した情報収集，編集，発信能力の育成へとシフトしてきた。このような中，情報教育におけるプレゼンテーション教育の重要性が高まってきている（菅井 2001，鵜木 2000）。筆者らは，長期的な目標として，プレゼンテーションの構成能力に焦点をあてた教育手法の改善･提案を目指している。そのためには，まず，プレゼンテーションの構成がどのようになされるのかを把握する必要がある。よって，本論文では，Bakhtin, M.の対話の理論とLatour, B.のアクターネットワーク理論に基づいて，プレゼンテーションの構成過程を明らかにすることを目指す。本研究は，プレゼンテーション教育の手法について考えるための基礎研究として位置づけられる。

２．研究の背景

バフチンによれば，全ての発話は対話である。発話は，必ず何らかの宛名を伴ってのみ可能であり，その意味で「どんな発話も，所与の領域の先行する発話への返答とみなすこと」ができる（Bakhtin 1986）。たとえば，話し手は聴き手の背景知識，先行する発話，しぐさなどから聴き手の反論を予測し，それを回避するように議論を立てていく（Wertsch 1991）。このように，発話は，先行する聴き手の声に対する何らかの応答であり，同時に，それに続く聴き手の反応を予想したものとなっている。発話とは，聴き手の声を取り込み，それにたいする回答として発せられるものなのである。一方，発話を理解することもまた対話だといえる。このことに関連して，Bahktinは次のように論じている。「理解すべき発話のひとつひとつの言葉に上に，私たちは自らの一連の答える言葉を，いわば積み重ねるのです。答える言葉が多くなればなるほど，また，それらが重要なものであればあるほど，理解はより深いものとなり，より本質的なものとなります。（Volosihov＝Bakhtin 1973）」Bahktinの主張の主旨は，発話の理解が話し手の声と聴き手の声の対話によって成立するということである。つまり，聴き手は，話し手の発言内容に対して，次から次へと「問いかけ」の声（それは，疑問や賛同，また批判といった声である）を生成し，その声への回答を発言の中に探しながら聞くのである。そして，発話が，聴き手の発するこれらの声一つ一つに回答を与えることができれば，聴き手は理解に至ることができるのである。逆にいえば，発話の生成において，このような聴き手が理解のため発するだろう声を予測し，それに対する適切な回答を組み込むことができた時に，その発話は聴き手に理解されるといえる。

対話理論の立場からみれば，プレゼンテーションにおける発話もまた対話とみなすことができる。そうであれば，プレゼンテーションの構成とは，聴き手が発するであろう声を自分の中に取り込みながら，内的に対話し，聴き手の声を理解の声へと組み替えていくための準備作

1) 茨城大学人文学部
2) 総合研究大学院大学文化科学研究科
3) メディア教育開発センター

業だと考えられる。聴き手の声と内的対話をおこなうために，プレゼンテーション構成者は，まず聴き手の声を想定し，それを自分のものにしなければならない。そのためにまず必要となるのが，聴き手が埋めこまれている社会的関係の理解である。なぜなら，人々の声は，かれらの社会的立場や人間関係を基盤として発せられるものであり，そのような関係から切り離して声を想定することはできないからである。つまり，聴き手の声を自分の中に自在に響かせて対話をおこなうめには，聴き手の声の背後にある動機や意図を推測することが必須であり，そのためには，そのような動機や意図の基盤となっている社会的関係を理解する必要があるのである。かくして，自分の中に取り込んだ聴き手の声には，聴き手が埋めこまれている社会的関係に関する理解が分離不可能な形でリンクすることになる。

プレゼンテーションにおいて聴き手は一人とは限らない。よってプレゼンテーションの構成において要請される聴き手の声の想定と対話は，複数の声への対処を含む作業となる。また，他者の声の想定と聴き手が埋めこまれている社会的関係の把握が不可分であるということは，他者の声には，さらに，多くの関連する人々の声が含まれていることを意味している。だとすれば，たとえ聴き手が一人だったとしても，その声との対話には，聴き手以外の声との対話が必然的に組み込まれていることになる。このように，プレゼンテーションの構成に関わる対話は二重の意味で多声的（Wertsch 1991）である。

ところで，プレゼンテーションは，伝達にしろ，理解にしろ，説得にしろ，なんらかのレベルで聴き手に変化をもたらすことを目的とした営みである。そのためには，想定した聴き手の声を一定の方向に変化させるための積極的な操作が必要となる。しかしながら，その具体的な方法についてBakhtinは論じていない。本論文では，そのような操作の在り方について考えるために，Latour, B.の科学研究を参考とする。

Latour（1987，1988，1996）は，科学的発見やテクノロジーがどのような社会的な操作を経て「事実」として位置づけられていくか（またそれに失敗するのか）を検討している。その中で，科学的事実が，人々や人工物からなる社会的ネットワークによって支えられていること，そして，ある発見を事実として構成するようなネットワークを作り上げるために科学者達が何をしているのかを明らかにした。事実を構成するために科学者らがおこなう作業の実例として，Latourは，連盟関係樹立や関心の翻訳を挙げた。連盟関係の樹立とは，ある事柄を主張する目的で，他者の言葉や論文，組織，人工物等との関係づけをおこなうことで自分の主張のサポートをさせることをいう。先行研究や統計の引用，新聞記事への言及，権威ある研究組織との提携，世論の利用といったことが連盟構築の例である。連盟のネットワークをうまく張り巡らせることが，反論に対する強度を高めることになる。関心の翻訳とは，他者の利害関心を自分の利害関心に同一化させるプロセスである。要するに，ある理論や技術を受け入れることが，聴き手の関心を満たすために避けて通れないルートとなるように，人々や人工物（理論や商品，データ等）の位置づけや関係の在り方を再定義することである。Latourが示したこのような調整作業は，ある発見や製品に対する人々の理解や受容をつくりだす作業だといえる。

Latourの研究に基づいて考えるならば，プレゼンテーションの過程は，単なる情報伝達ではなく，関連する様々な他者との関係の中で，聴き手の埋めこまれている社会関係を繋ぎかえて，再構成する作業だということになる。そこでは，聴き手と他の人々との折り合いを付けるような，社会的で政治的な調整がおこなわれることになる。

Bakhtinの対話理論とLatourの科学研究を組み合わせて考えれば，プレゼンテーションの構成作業とは，「関連する人々との仮想対話をとおした社会的ネットワーキング作業」（以降，社会的ネットワーキング）だといえる。これはあらゆる種類のプレゼンテーションについて当てはまると考えられる。例えば，プリブル・坂本（2004）は，目的によってプレゼンテーションを「情報提供型」，「説明型」，「説得型」の3つに分類している。情報提供型プレゼンテーションは商品の機能紹介や歴史の紹介のように，単に事実だけを示すようなプレゼンテーションであり，説明型プレゼンテーションとは，情報提供を積み重ねながら何事かを達成する手順あるいは活動の背後にある過程に焦点をあてるものである。説得型プレゼンテーションは，聴き手の態度や行動の変化を引き起こすことを目的とするプレゼンテーションである。このような目的が違うプレゼンテーションであっても，その構成においては，レベルの差はあれ，社会的ネットワーキングがなされると考えられる。なぜなら，プレゼンテーションは全て他者を想定した営みであり，そうである以上，必然的に，それは対話的過程にならざるを得ないからである。

Bakhtinの対話理論とLatourの科学研究の組み合わせは，プレゼンテーション構成の過程を捉える枠組みとして有効だと考えられる。しかしながら，Bakhtinの対話理論は，文芸作品の分析から生まれた理論であり，Latourの科学研究は，科学理論や新商品が社会に受け入れられた（もしくは受け入れられなかった）経緯を，残された文献や資料をもとに考察したものであって，プレゼンテーションの構成という，いわば進行中のプランニング状況において人々がどのように他者の声と対話し，調整をおこなうのか，という問題については検証が必要である。よって，本論文では，具体的なプレゼンテーション構成場面の観察をとおして，プレゼンテーションの構成において社会的ネットワーキングがどのようになされ

るのかを検討する。

3．調　査

本論文では，Bakhtinの対話理論とLatourの科学研究の視点に基づいて二つのプレゼンテーション準備場面の観察をとおした事例研究をおこない，プレゼンテーションを構成する中で，人々が，どのように聴き手の声を取り込み，どのように社会的ネットワーキングをおこなうのかの詳細を明らかにする。事例研究とは，研究の対象としている社会的現象が発生している事例を観察することによって知見を得ようとする質的研究手法である。理論的基盤で分類するならば，本研究は，構成主義パラダイムに立つ解釈的事例研究（Denzin & Lincoln 2000）である。

調査1では，大学生による大学事務局に対する要求提案プレゼンテーション，調査2では，大学院生の学位研究の中間発表を取り上げる。プリブル・坂本（2004）によれば前者は説得型プレゼンテーションに，後者は，説明型プレゼンテーションに分類される。二つの調査は，別のプレゼンテーション事例の分析であるという意味で，複数のデータ源によるトライアンギュレーション（Merriam 1998）としても位置づけられる。

3.1　調査1：説得型プレゼンテーションの分析

3.1.1　対象と方法

事例として，X大学広報誌「X-magazine」の3代目学生編集長MS（男性）による学生支援課に対する待遇改善要求プレゼンテーションの構成場面を取り上げる。

この調査では，観察対象者の発話に注目して分析をおこなう。そのために，プレゼンテーション準備場面をビデオ録画し，そこから分析対象者の発話や会話を書き起こした。発話や会話は，プレゼンテーション準備が進行する最中（さなか）になされるもので，その作業の状況を示すとともに，その作業そのものを作り出していく資源となっていると考えられる。よって，これらの情報に注目することで，観察対象者が，どのように聴き手を初めとする様々な他者の声を想定し，それらの声と対話しながらどのように社会的ネットワーキングを展開していったのかを，観察対象者に近い形で捉えることが可能となると期待できる。

3.1.2　事例の背景情報

本事例の背景について以下に述べる。

X大学は5学部からなる総合大学で，A市，B市，C市にキャンパスが分散している。本部はC市にあり，そこに3つの学部がある。MSはX大学の文系学部C学科3年生である（C市キャンパスに通学）。X-magazineは，X大のオフィシャルな広報誌である。年2回（4月と10月）発行され，在校生，保護者を中心に配布される。発行部数は，4月号が5000部，10月号が4500部である。発行の主体はX-magazine編集委員会（学生支援課職員2名と教員3名から構成される学内委員会）だが，数年前より，学生ボランティアが編集を担当してきた。学生支援課は，奨学金関連の事務，就職情報の提供，サークル活動の支援，在学生と保護者に対する広報活動等をおこなう部署である。この部署から2名がX-magazine編集委員会に参加している。X-magazineの編集部は，大学3年生の中心メンバー5名と，2年生4，5名程度で構成されている（調査当時）。2年生の人数が概数なのは，立場が曖昧なメンバーが混じっているためである。編集スタッフは，ほとんどがMSと同じC学科の学生である。2年生に1名，他学科の学生がいる。編集のスケジュールは，概ね次のようになっている。①発行の6ヶ月前：編集部内で企画会議をおこない，企画書を作成，②発行の5ヶ月前：編集委員会で企画プレゼン，承認をうける，③承認後，取材，編集活動（編集はコンピュータを利用），④発行1ヶ月前：ドラフト版完成，編集委員会（学生スタッフも参加）でチェック，⑤編集委員会で指摘された問題点を修正，⑥印刷，配付。編集委員会には3名の教員が入っているが，これらの教員は，年4回の編集会議に出席し，学生の提案した企画案とドラフト版をチェック，承認するのが仕事である。学生支援課は，学生編集スタッフの取材や編集の援助，印刷に関わる発注業務等をおこなっている。 MSら3年生スタッフは，昨年度から編集に参加している。MSらは，参加当初より学生支援課に対して不満を感じてきた。不満の主たる原因は，取材経費の支払い制度の不備，新しい試み（WEB版の立ち上げ，地域への配付）に対する消極的姿勢，丸投げ体質等であった。特に取材経費の支払いに関する不満が大きかった。取材経費の支払い制度はこのプレゼンテーションがなされた時点では存在しなかった。取材経費は，学生編集スタッフらが自腹を切って出していた。昨年度，MSらの再三にわたる要求の結果，学生支援課の職員は，自分のポケットマネーをMSに渡した。これにより学生は立て替え金を取り戻すことができたが，取材経費の立て替え期間が長かったことと，これが，その場しのぎの対処であったことで，MSらの不満は解消されなかった。MSらは，改善を担当職員に訴え続けてきたが，全く進展がみられないままに担当者が異動してしまった。そこでMSは，学生支援課の新しいX-magazine担当者に対して，改善提案のプレゼンテーションをおこなうことにした。

3.1.3　データ収集

ここでは，収集したデータについて述べる。

MSと同僚による初回の打ち合わせから，第一回目の発表練習までの約1週間に渡る準備作業をビデオカメラで録画した。録画した場面は，編集スタッフとの打ち合

わせ場面2回（打ち合わせ1，打ち合わせ2），MSによるスライド作成作業1回，発表練習である。

打ち合わせ1は，MSとNK（男性）の二人でおこなわれた。NKは，MSと同学科同学年の学生であり，昨年度から一緒に活動している。この打ち合わせでは，プレゼンテーション方針，構成について議論された。

スライド作りは，MSの自宅でおこなわれた。この作業は単独作業であるため，強制発話法を実施した。強制発話法とは，被験者に，考えていることを全て声にだしながら作業してもらい，それを録音データをもとに分析をおこなう方法である。従来観察することのできない思考の流れを捉えるための一つの方法である。被験者への負荷，発話される内容の選択性等の問題があるが，MSが，どのような考えに基づき，何を念頭においてスライド作成をおこなったかを知るための手段としては最適であると考えて採用した。調査に先立って，MSは，30分の強制発話練習をおこなってある。なお，スライド作成は，Microsoft社製のPowerPointを使ってなされた。

打ち合わせ2には，さらにFN（女性）が加わった。FNも，かれらと同学科同学年の学生である。この打ち合わせでは，まず，MSが自分の作成したプレゼンテーションを，スライドを見せながら説明し，その後，内容について検討がおこなわれた。

発表練習には，教員（SK）も参加した。SKは，彼らの指導教員である。発表練習では，まずMSがプロジェクターを使って投影しながら口頭発表練習をおこない，その後，内容について3人で議論した（発表練習における議論は分析から除外した）。発表練習におけるプレゼンテーションは，タイトルスライドを含めて11枚のスライドから構成されていた。これらの各スライドのタイトルと，そのスライドに対応する口頭発表内容を文末に資料として載せた。資料中，口頭発表内容は，発表練習におけるMSの発話のトランスクリプトを筆者が縮約したものである。

3.1.4　データ

本論文では，スライドNo. 3，スライドNo. 5，スライドNo. 6をとりあげ，その構成過程を分析する。これらスライドを取り上げた理由は，これら3枚が，取材経費と物品購入に関する問題提起と提案を含むスライドだからである。先述したように，このプレゼンテーションの主要な目的は，取材経費の支払いに関する改善要求である。

なお，以下のトランスクリプト中，空白を含むカッコは，音声が不明瞭で聞き取りが不可能であった部分を示す。

3.1.4.1　スライドNo. 3の構成に関する発話

図1にスライドNo. 3を示す。スライドNo. 3は，「困っています！取材経費」というタイトルのスライドで，そこには，X-magazineのあるコーナー（見開き2ページ）の製作にかかった費用が細かくリストアップされている。

図1　スライドNo. 3

口頭発表練習においてMSは，このスライドを提示しながら，次のように説明した。

【スライドNo. 3　口頭発表内容】

MS：で，取材経費の問題ってことなんですけど。えー，取材経費。えーっと，今まで色々なものを買ってい，買ってき，いただいたり，お金を出してもらってたんですけど，自分たちも，えー，何にいくらかかったとか，こうだから，この，えー，ここにいくらかかるからっていうのをちゃんと明確に伝えてこなかったっていうのがあって，そこも自分たちにほんと問題があったと思うので，これからこういうのを明らかにしていきたいんですけど，これは前号の27ページ28ページの「IBA CHUKI」っていう特集のページです。で，えー，このページを，えー，作るのにかかった取材費が，えー，を，に，あげたものなんですけど，えー，これ以上でもこれ以下でもなくて，えー，この取材にかかったのはこれで全部です。で，車のガソリン代だけ，あの，距離数を，そん時測っていなかったので未確認となっていますけど，えー，5100円プラス車のガソリン代がこのページの取材でかかってます。

この内容に関して，MSは，打ち合わせ1において次のように述べている。

断片1

MS：経費を具現化したい。この4ページ作るだけで5000円ちょっとくらいはもうかかってわけよね（中略）これもちゃんと請求すればさ，絶対かかってるわけだからさ，ちょろまかしてるわけじゃないっ

ていうのをちゃんと数字にして表したいのね，向こうとしてはこんな出して，ほんとはお前らが遊びに使ってるんじゃないかってのがあると思うんだけど，ほんと数字にだしてさ，これだけかかってるっていうのを，それをボランティアでやってるんだよっていうのを。

1回目の合わせの終了付近で，MSは，NKと自分たちの議論を振り返る。その時の会話は，以下のようなものであった。

断片2

MS：［01］どうなのかな？まずここまでどう？
NK：［02］とりあえず正座しろっていうことだよね。
MS：［03］とりあえず。学生支援課。たぶん今の人は分かんないんだよ。変わっちったんだもん，前の人たちが悪いんだもん。
NK：［04］それ言ったらTDに罪はないんだ。
MS：［05］罪はないけど，学生支援課に来た以上は，ねぇ。責任をぬぐってもらわないと，その。どうだろ？喧嘩腰に言ってもやっぱ駄目だよね，うまく言わないと，それが難しい。だって，これだけされてくるとさ，喧嘩ごしになっちゃうのよね。お前ら，こんなこと，これだけおざなりにしてきだんだぞって言いたくなるんだけど，そこをどうやって，向こうが気持ちよく出させるかっていうところが難しいのよね。なんて言うんだろうね？
NK：［06］難しいね，言葉を選びつつ。

1回目の打ち合わせ後，MSは自宅にもどり，単独でスライド作成に取り組んだ。断片3は，スライドNo. 6を作成しながらMSが発話した内容である。発表練習のプレゼンテーションでは，取材の経費と，交通費を含む他の費用に関する要求が，スライドNo. 3とスライドNo. 6にわけて示されている。スライドNo. 6では，制作段階で必要となる機材や取材のための交通費についての要求がまとめられている。次の発話は，ガソリン代をきちんとだして欲しい，という要求部分に関わる発話である。この発話は，スライドNo. 3の構成に関連している。

断片3

MS：学生支援課と，学生支援課と，学生が情報を共有すると。今まで，学生も何に使ったっていう，ちゃんと，そういう，何にいくら使ったっていうのを，明らかにしないと，とにかく金がかかるからくれと。で，学生支援課も，学生支援課長さんも，学生支援課長さんじゃないか，学生支援課の人達も，いまいち本当に必要な金なのか，遊びに使ってるんじゃないか，いまいち，不審がりながらポケットマネーを出してくれるっていう，そういうのじゃ，制度としていけないと。学生が，ええ，会計を立てて報告するから，その，かかった分だけ，用意してほしいと。会計を立てて，かかった分だけちゃんと要求するので，かかった分だけ，かかる分だけでいいので支給してくださいと。

自宅でスライドを作成した後，MSは，NKとFNと打ち合わせをおこなった（打ち合わせ2）。FNは，学生編集スタッフの一人で，NKと同様，MSと同じ学科の同級生である。この打ち合わせでは，まずMSが，スライドを見せながら内容を解説し，その後，内容について議論がなされている。

次の会話は，スライドNo. 10を説明している部分である。スライドNo. 10は，X-magazineを地域の人々にも配付するという提案部分であるが，話題は，スライドNo. 3に関連した話題，すなわち，取材経費の話に移行していく。

断片4

MS：［01］【注：X大学をもっと知ってもらうために】外に発信するものが大事なんじゃないかっていう。そこをこうやって学生が自らやりたいといってるんですけど，どうですか？それを，止めるんですか？っていう。まぁそういう言い方はまずい。
FN：［02］それか支援してくださいってことよねぇ
MS：［03］もうちょっと下手（したて）に言わないといかんかね，これ。
FN：［04］うんうん。
MS：［05］お金を出してくれっとか言ってたのも，今まで俺らもただ，なにも明らかにしないでお金を出してくれ，必要だからくれ，って言ってたけど。だけど。ちゃんと見積もりを出して，これだけ使ってこれだけかかったから，その分補給してくださいって言うような頼みかたをして，ちゃんとそこ意思疎通をして
FN：［06］うんうん（　）うん。
MS：［07］学生支援課との情報を共有して，なんだろいい環境を作りたいと，こっちも別に遊びで使ってるわけじゃなくて
FN：［08］うん
（中略）
FN：［09］その，今まであれやったわけよね，X-magazineはX-magazine内で，学生支援課がお金出してくれん，みたいんなって。学生支援課は，学校かしらんけど，別に色々な制約があって，こたえられん部分もあったけど。これ，を聞

いてくださいっていうことで，そうなのねって思って，そっちが動かせたらいいっちゃね

MS：［10］うんうん。そうだね

FN：［11］それから先よね

MS：［12］うん

3.1.4.2　スライドNo. 5の構成に関する発話

スライドNo. 5は，「取材の望ましい形」というタイトルのスライドである。そこでは，まず取材の望ましい形について説明され，そこから，取材費支払い制度が提案されている。

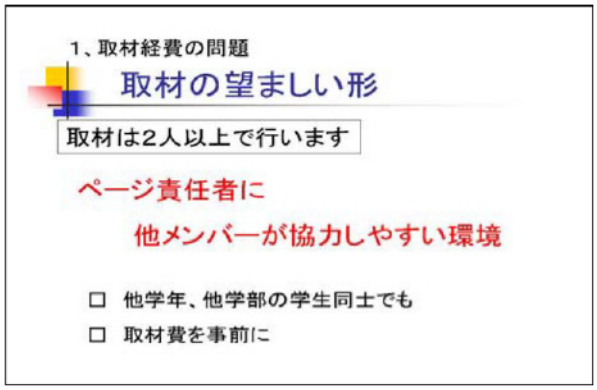

図2　スライドNo. 5

口頭発表練習においてMSは，このスライドを提示しながら，次のように発話した。

MS：取材は，えー，絶対二人以上でおこなっています。で，車，車依頼する人がいたり，えー，結局なんかお金がかかるんですけど，取材に望ましい，何が一番整えておきたいかというと，ページ責任者に他メンバーが協力しやすい環境，っていうことです。（略）車持ってない人が取材に行きたい時は車だしてって言わないといけないんですけど，例えばそのガソリン代が今出てないわけですね。そういう時ここ行きたいここ行きたいってそのページ責任者は思うんですけど，やっぱ頼みにくいっていう。結局その人のガソリン代を自腹で払わして（略）これから他学年とか他学部の視点も入れて大きな組織としてやっていきたいって思ってるんですけど，そうなった時に本当に今，C学科の3年生だけがコアメンバーでやってるんですけど，その中でやってた分には，まぁ，そのー，まぁ，気心も知れてるし，その依頼もしやすいですし，お金が出なくてもまぁなんとか行ってあげようっていう感じにはなるんですけど，この，これから大きくなってって，あのー，組織がおっきくなった時にこの環境が整ってないと，この，この環境が，あー，あれですね，そのー，メンバーにとって，えー，やな状況になってしまってるっていう現状です。で，取材費を事前にっていうのは，えー，なんですかねー，そういう制度が必要だと思います。

ガソリン代の問題に関して，打ち合わせ1において次のような会話がある。

断片5

MS：［01］同乗できたからいいけど，もし同乗できなかったらもう一回行く事になっていたわけで，A市，B市は分かりやすくちゃんと値段を出して，あの，もうちょっと高い値段って言ったらあれだけど，もうちょっと高い値段とっておかないと，絶対学生が負担することになっちゃうと。（略）ONさんのページは取材費が一万くらい近くかかっているじゃない。だから，これだけのページを作るにも，いると。もし，それを否定されるようなら，もう企画，自分たちで練れって言う風に言いたいわけよ。

（略）

MS：［02］ONさんなんて一万ていう大金を，学生が我慢して1ヶ月肩代わり，おかしいだろっていう。一万待ってもらったよね，さんざん。一万と。

MK：［03］俺もあったぞ。

MS：［04］うん，あったね。NKの内訳覚えてる？

NK：［05］内訳？

MS：［06］たぶんガソリンとあれよね。ガスとあれよね。

NK：［07］そだね，A市が100キロ前後くらいで，B市が120，130キロぐらいだった気がする。

打ち合わせ1のあと，MSは，自宅でスライドの作成にとりかかる。MSは，スライドを作成しながらスライドNo. 5の内容について次のように述べている。

断片6

MS：えー，大切なことはページ責任者に他メンバーの協力しやすい環境作り。他学年，他学部。望ましい形，今C学科のみでやってんのは，興味のある学生が，A学科に偏ってるってことじゃなくて，たぶん，えーと，気が知れたもの同士じゃないと，クラスが一緒とか，気が知れた者同士じゃないと，制作に支障をきたすような制度でやってるから（略）これだと，いつまでたっても，C学科の雑誌，C学科の雑誌みたいになっちゃってるし，他学部にも開放できない。（略）組織が大きくなっていっ

た時，（略）対応出来なくなる。（略）他の学部にも解放できるように，他学年，他学部同士，協力しあえるように，そのためには，えー，取材費ってかかったお金に対する制度がちゃんと必要だろうし。中には一万円も肩代わりしていた学生もいますし，取材協力をしにくい状況につながる一つの要因となってるような気がします。こう言うと，向こうも断りにくいかな，学生支援課も。（略）で，取材に望ましい形っていうのは，ページ責任者に他メンバーが協力しやすい環境作りっていうことに尽きる。それをするためには，取材費，取材費っていうものは，事前に，事前に。取材にかかったお金っていう，使ったお金，かかった分だけは，あの，すぐおりるように，取材費っていうものは，手元にないと

3.1.4.3　スライドNo. 6の構成に関する発話

スライドNo. 6は，「困っています！制作段階」というタイトルのスライドである。そこには，制作段階に関わる問題と必要物品がまとめられている。ここでは，「DTP関連書籍購入」について，という項目に注目する。

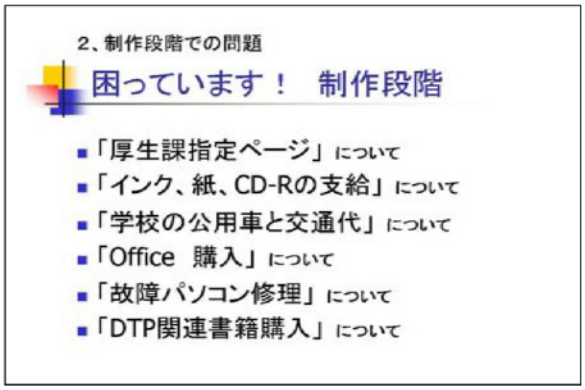

図3　スライドNo. 6

口頭発表練習においてMSは，このスライドを提示しながら，次のように発話した（「DTP関連書籍購入」に関する部分のみ）。

【スライドNo. 6　口頭発表内容（一部）】

MS：えっと，DTP関連書籍購入のお願いなんですけど，これ前回えー，10数冊えーこのDTPえー，うちらが活動するのに必要な技術の本とかを買っていただいたんですけど，やっぱ，生徒たちからの，あれですね，人気も高いというか，やっぱみんなあったら読むし，そのーなんですかねー，技術を高めようと思うわけですよ。で，これで，なんですかねー，後世代にもその技術が伝わりやすいと思うし，こういうのがやっぱ揃ってると，えー，ありがたいわけです。で，まだ不足している部門のものがあるので，できればそのDTP関連書籍っていうのも購入していただけるとありがたいです。

スライドNo. 6において，MSは，書籍の購入を要求している。それに関する会話が，打ち合わせ2にある。

断片7

MS：［01］関連書籍購入は，もっと買ってくれ，って本をっていいたいの俺は。

FN：［02］うんうんうん

MS：［03］で，これからまあ，Web版なり作ったり色々，あるし，なんだろうな，ん。買えば多分…，それほど読んでないかな。なんかみんなありがたがって，読んでないか？

FN：［04］えへへへ

MS：［05］みんなありがたがって読んでいますって言う。ほんとになんかね後輩に技術を伝えるために必要だし。で買ってくれっていう

FN：［06］うんうん

MS：［07］いいます

3.1.5　分析と考察

ここでは，上記のデータに基づいて，説得型プレゼンテーションの構成において，社会的ネットワーキング（聴き手の声の想定をとおした社会的ネットワーキング作業）がどのようになされているかを分析する。

3.1.5.1　聴き手の声の想定

断片1において，MSは，自分の要求に対して発せられるだろう学生支援課の声を想定し，それに対して答えようとしている。一見してわかることであるが，この対話は喧嘩腰である。MSが，このような敵対的な対話を想定した背後には，過去1年間にわたる改善要求を学生支援課が無視し続けてきたことに対するMSの怒りがあると推測される。打ち合わせ1の他の場面におけるMSの発話が，このことを支持している（例えば，「MS：向こうは嫌な気持ちになるなと思う，気に入らないっていうか。でも，これだけしてたんだから言われてもしょうがないだろう」）。

この仮想的対話の内容についてさらに細かく検討してみる。MSは，まず，学生支援課が取材経費の要求を蹴る理由として，学生スタッフに対する学生支援課の一つの声を想定する（すなわち，取材経費を「遊びで使ってるんじゃないか」，という声）。このような声を発する学生支援課への対処として，MSは，「ちょろまかしているわけじゃない」と反撃しながら，さらに，この反撃をサポートする情報として，正確な取材経費の情報をスライドに取り入れようとしている。

「ちょろまかす」とは，他人の目をかすめて物を盗むことである。この言葉を使って他者の行動を表現することは必然的に非難のニュアンスを帯びるといってよいだろう。よって，「ちょろまかしてるわけじゃない」というMSの声は，学生支援課の声を，自分たちの経費要求に対する非難と位置づけた上で，それに反撃するものとして聞くことができる。

断片2の会話においてMSとNKは，これまでの仮想対話を振り返る。ここでNKは，自分たちが想定した仮想対話の内容を，「とりあえず正座しろっていうことだよね［02］」と要約し，これにMSも賛成する。ここで「正座しろ」とは，厳しく反省と謝罪を求める言葉だと考えられる。この要約は，MSの聴き手の声との対話の帰結として想定するのが，ひざまずく学生支援課の「すみませんでした」という声であることを可視化する。続くMSの発話［05］からは，このような帰結が彼の感情的ゴールには合致することが述べられるが，同時に，違和感も表明される（「喧嘩腰に言ってもやっぱ駄目だよね」）。この違和感は，MS自身がここで再認識したプレゼンテーションのゴールと，「正座しろ」という言葉で要約されるような仮想対話との不整合に基づくものだと思われる。なぜなら，MS自身が述べているように，彼のゴールは，学生支援課に「（取材経費を）気持ちよく出させる［05］」ことだからである。つまり，彼が帰結として得るべきは，「すみませんでした（しかも，可能性としては，この謝罪は強いられるもので彼らが心からそのように思うとは限らない）」という声ではなく，「わかりました。取材経費，是非とも出せるようにしましょう」という声なのである。しかし，「正座しろ」という言葉には，そのような前向きな返答は決して返ってこないことをMSはここで認識しているといえる。

この会話が，断片3に見られるような仮想対話の再編成にどれほどの影響を与えたのかは，この調査からはわからない。しかし，ここでみたような対話の端的な要約が，対話の組み直しのための資源になりうることは確かだと思われる。

断片3では，断片1に見られた仮想対話が編集されている。断片1においても，断片3においても，想定されている学生支援課の発言はほぼ同じである。すなわち，学生支援課は，MSらの経費の要求に対して「遊びに使ってるんじゃないか」と疑問を呈している。断片1においては，これに対してMSが反撃する，という対話が想定されていた。しかし，断片3においてMSは，この対話を組み替える。

ここでMSは，学生支援課の声に対して，「会計を立てて，かかった分だけちゃんと要求するので（中略）かかる分だけでいいので支給してください」という，謙虚でかつ解決策を含む声で答えている。それと同時に，経費の要求する自分たちに，「とにかく金がかかるからくれ」という性急なニュアンスを持つ声を与えている。

このような組み替えによって，学生支援課の声のニュアンスは「経費要求に対する非難」から，「学生の性急な経費要求に対する不審感の表明」へと転換される。かくして対話は，自分たちの要求に不審を抱く学生支援課に対して，きちんと情報を提供することで必要性を理解してもらうという対話に再編成される。そして，この新たな対話の中で，正確な取材経費の情報は，学生支援課の不当な非難に対する反撃ではなく，共通理解のための手立てとして位置づけなおされている。

ここで重要なことは，MSが立てた新しい仮想対話は，MSの発する声の転換のみでなく，それに応じた，学生支援課の声のニュアンスの転換と不可分であったということである。

同様の発話が，この直後にもあった。以下は，スライドNo. 6の，ソフトウェアの買い増しを要求する部分に関わる発話である。

断片8

MS：いろいろな物を買って頂いたんですが，たぶんその必要性も学生支援課の方々には伝わってなくて，ただ買わされてるっていう，学生もそれを，学生支援課に伝えようとしないで，ただ欲しいものを要求する。そういうような状況だったんですが…情報の共有で，一枚スライドとったほうがいいかな。新しいスライドで，えーと，1枚スライドとったほうがいいな。

ここで想定されるMSら学生編集スタッフと学生支援課の対話も断片3の分析で示した対話と同様だと考えていいだろう。興味深いのは，この発話の冒頭部分が，ほぼそのままの形でスライドNo. 3の口頭説明の中に現れていることである。このことは，ここで組み替えられた仮想対話の内容が，たしかに，スライドNo. 3の中に組み込まれていることを裏付けている。

その後の打ち合わせ2において，MSは，自分が構成した仮想対話について語っている。断片4でMSは，NKとFNに対してスライドNo. 10について説明している。スライドNo. 10は，X-magazineを地域の人々にも配付するという提案部分であるが，話題は，スライドNo. 3に関連した話題，すなわち，取材経費の話に移行する［断片4の［05］以降］。

MSは，X大学を地域の人々にもっと知ってもらうために，X-magazineを地域の人々へ配付する必要があることを指摘している。そして，それに「（それを）学生が自らやりたいといってるんですけど，どうですか？それを止めるんですか？」と付け加える［01］。学生支援課は，X-magazineを，保護者と在学生向けの雑誌と考えているために，それを地域の人々に配ることには消極的な姿勢

をとっていたという事実がある。MSの発言は，このことをふまえてのものだと考えられる。これは取材経費に関する発言ではないが，断片1において模索されていた，学生支援課を責め立てるような仮想対話に合致するものである。しかし，MSは，直後に，「まあそういう言い方はまずい［01］」と続けることで，それを否定している。これは，自分の過去の声を引用しながら，現時点での認識（断片2後半，断片3に現れているような）を示すものだと考えられる。これにFNが，「それか支援してくださいってことよねぇ［02］」と続けることで，責めるようなプレゼンテーションではいけないということが両者の共通認識として可視化されることになる。「もっと下手（したて）に言わんといかんかね，これ［03］」–「うんうん［04］」というやりとりも，同様の確認だと考えられる。この後，MSは，取材経費の要求について話しはじめる。ここでMSは，スライドづくりにおける自分の語り（断片3参照）を，ほぼ忠実に再現［05，07］し，FNは，あいづちに［06，08］よって，それを承認している。

ここで，MSとFNは，MSが現時点で到達している説得ストーリー（学生支援課を説得していく過程のストーリー）を二人の会話の形で語り直すことをとおして，それを共有していると考えられる。同時に，ここでおこなわれているのは，その説得ストーリーを表現している仮想的対話を他者（FN）と一緒に再演することによる「強さのテスト」だともいえる。

さらに，この後，FNは，MSが構成した説得ストーリーを自分の言葉で要約している［09］。このことによって，その説得ストーリーはFNの視点の中に取り込まれる。その結果，学生支援課は組織的な制約があって学生編集スタッフの要望に応えることができなかった，という新しい理解が挿入されている。これは，断片1から断片3に至るまでの仮想対話の変遷の中では現れなかった視点である。これに，MSも賛成する［10］。

以上の分析が示すように，プレゼンテーションの構成において，学生支援課の声が想定され，その声との仮想対話がなされていた。このようなプレゼンテーション構成のあり方は，「どんな発話も，所与の領域の先行する発話への返答とみなすこと」ができるというBakhtin（1986）の対話理論と整合している。

3.1.5.2　対話のシミュレーション

今回の調査では，聴き手の声への返答が，どのようにして構成されるのか，その過程の一部が明らかになった。それは，対話のシミュレーションとでも呼ぶべき，動的で柔軟な対話の編集，可能性の模索をとおしておこなわれていた。例えば，打ち合わせ1においてMSは，学生支援課の非難の声を想定し，それに対して激しく反撃するような対話を想定するが，その後，この対話を組みかえながら，聴き手との別の関係の在り方が構想された。また，打ち合わせ2においては，一度構成された仮想対話が他者を入れて再度演じることで吟味されたり，MSの立てた仮想対話がFNによって引き取られて語り直さることで新たなアイデアが盛り込まれたりすることが観察された。このように，プレゼンテーションの構成過程において，聴き手の声は，一度想定し，それに回答を与えてしまえば終わり，というものではなく，様々な対話の試みの中に組み込まれ，様々な仮想対話の可能性が模索される中で，その位置づけを変えるのである。このような柔軟な対話シミュレーションがアイデア創発の基盤となっていると考えられる。

対話のシミュレーションをとおして新しいアイデアが生みだされるのはなぜか。このことについて専有（appropriation）という概念に基づいて考えてみる。バフチン（1986）は，二名以上の話者が対話の中でお互いの発話を自分なりの視点から引用しあう行為を「専有」と呼んだ。Wertsch（1998）は，専有を，「他者のものを自分のものにする過程」と説明している。つまり，他者の声を自分の中に取り込み，支配して，自分の目的のために使うことを意味する。プレゼンテーションの構成過程において想定される聴き手の声は，プレゼンテーションの作り手によって専有されたものだといえる。

学生支援課へのプレゼンテーション構成過程において出現した学生支援課の声は，全て，MSらによって専有されたものだといえる。例えば，スライドNo. 3の構成の初期において，MSが，学生支援課の疑念の声を想定し，それを「経費要求に対する非難」として位置づけていたが，この時，学生支援課の声は，MSの想定する仮想対話の中に組み込まれ支配されているといえる。その後，MSは，対話を再編集し，学生支援課の声を「経費利用に関する不審感の表明」として位置づけ直している。この新たに位置づけられた声には，学生支援課に対する共感的な理解が組み込まれており，故に，このような仮想対話に基づいて構成されたプレゼンテーションは，学生支援課によって受け入れられる可能性が高いと期待できる。もちろん，この新しく想定された声も，MSによって専有されたものであることには変わりはない。それは，MSが新たに立てた，「学生支援課との情報共有」という方針の中に組み込まれ，利用されている。

想定される聴き手の声は，どのように位置づけを変えようとも，脱専有されることは原理的にあり得ない。ただし，MSが実際におこなったように，想定した声を転換することは可能である。例えば，断片1において想定された「本当は遊びで使ってんじゃないのか」という学生支援課の声は，「非難」のニュアンスを持つものであるが，断片3では，同じ声に，「不審感」のニュアンスが与えられている。想定した声を柔軟に転換できるか否かは，それを基盤とするプレゼンテーションの質に多大な影響を与えると考えられる。

可能性としては，MSは，最後まで学生支援課の声を「非難」として位置づけ続けることができた。その場合，MSは，非難に対する反撃としてのプレゼンテーションを構想しつづけることになったであろう。最初の想定に拘ることが必ずしも悪い結果を生むわけではないが，少なくとも，仮想対話の他の在り方の可能性を知ることができるという意味で，一旦専有した声に揺らぎを与え，別のニュアンスに転換することはメリットを持つだろう。対話のシミュレーションとは，このような声の転換を可能にする場だといえる。

この観察の中では，声の転換の方法として，二種類の可能性が示唆された。一つは，スライドづくり場面でMSがおこなったように（断片3参照），想定した仮想対話を組み直す方法である。もう一つは，自分が想定した対話（想定した声が含まれている）を，他者に引き渡して，語り直してもらうという方法である（断片4参照）。

断片4では，MSが構成した学生支援課との想定対話を，FNが引き取って語り直している（断片4［09］）。ここでFNは，MSの声を専有しているといえるが，それは，間接的にではあるが，MSの声の中に埋めこまれている学生支援課の声を専有しているともいえる。

このようにFNに専有されたMS（間接的には学生支援課の）声は，FNの視点の中に取り込まれており，同じ声であっても別のニュアンスを帯びることなる。このことは，学生支援課との対話や，関係の在り方について，新しい共通理解を生む可能性を持つことを意味する。なぜなら，「話者がそれぞれ専有を行うことで，互いの視点を盛り込んで，共同行為的にそのことばの「理解」が構築される（Bakhtin 1986）」ことが期待されるからである。同僚と一緒におこなうプレゼンテーションのリハーサルや議論が持つ創造性の一端は，このような相互的専有の効果として説明できるだろう。

3.1.5.3　社会的関係の理解と調整

3.1.5.1と3.1.5.2で，MSが聴き手の声との仮想的な対話を構成し，それを組み替えていたことを示した。その過程は，MSと学生支援課がどのような関係にあるのかを理解し，また，その理解を更新する作業と不可分であった。

例えば，断片1において，MSは，自分と学生支援課を，学生スタッフが取材経費を遊びで使っているのではないかと非難する人々として位置づけ，その関係において，自分たちを，そのような非難に反撃する，怒れる人々として位置づけている。

断片1の最後の「これをボランティアでやっているんだよ」という発話は，上記の関係をさらに巧妙に繋ぎかえるものである。この発言は，MSら学生スタッフを，ボランティアで学校のために働く善意の人々として位置づける。こうすることで，学生スタッフと学生支援課の新しい関係が可視化されることになる。すなわち，学生スタッフを非難する学生支援課は，大学のためにボランティアで働く「良い」学生を不当に扱う存在として位置づけ直される。自分たちと学生支援課の関係をこのように想定することはMSの主張をさらに強化することになる。なぜなら，大学の利益のために働くことが求められる学生支援課にとって，大学の利益のためにボランティアで働く善意の学生スタッフを疑い待遇の改善を怠ることは，職務上の義務に反する行為となってしまうからである。ここでは，自分たちと学生支援課の対立する関係だけではなく，学生支援課が埋めこまれている社会関係（すなわち，大学という組織との関係の中で，一定の義務を負っているという関係）が関係理解に中に盛り込まれているといえる。

断片3では，学生支援課とMSらの関係は，ドラスティックに再編成される。ここで学生支援課は，善意の学生を不当に非難する人々から，学生の要求の適切性について「いぶかる人々」へと位置づけを変える。学生支援課に反撃するという想定対話から，情報共有を提案するという想定対話への変化は，このような関係理解の変化と密接に結びついている。なぜなら，想定対話は，このような関係の理解にたった上で，現在の関係を調整して何らかの方向に変化させるようなものとして構想されるからである。

関連する人々の社会的関係を理解することは，対話のシミュレーションの基盤であった。MSは，学生支援課が埋め込まれている社会的ネットワークに関する仮説を絶えず更新し続けていた。このネットワークを自分の中に取り込み，それを仮想的に駆動してみることでMSは，学生支援課の声を生成することができたといえる。MSは，学生支援課が埋めこまれた関係（大学組織の中の位置づけ，職務上の義務，期待される学生への支援等）の把握に基づいて，学生支援課の声を想定し，それと対話をおこなっていた。つまり，「学生支援課が何をいいそうか」を想定するためには，学生支援課がどのような社会的ネットワークの中にあるのかを把握する必要があったのである。もちろん，社会的ネットワークの把握と対話シミュレーションは，相互貫入の関係にある。すなわち，関連する人々の社会的関係は，他者の声を想定し対話のシミュレーションをおこなう基盤になるとともに，その対話シミュレーションを通して可視化されるものであると考えられる。

スライドNo. 6の構成過程では，MSの公共的位置づけが確保される様子が見て取れる。スライドNo. 6において，MSは，書籍の購入を要求している。スライドNo. 6の口頭説明で述べているように，前年度に，MSらは，10冊程度の技術書を買ってもらっているが，ここでは，追加購入を要求している。要求の理由として，MSは，これらの本がスタッフ間で人気があり，また，

後世代に技術を伝えるためにも有用であることを挙げている。このような口頭発表内容が，どのように構成されたのかを示す会話が打ち合わせ2にある。以下，この会話（断片7）を検討する。

断片7においてMSは，書籍の購入を要求することをFNに報告する［01］。これにFNは,「うんうんうん［02］」と答えている。これは，少なくともそのような要求をおこなうことに異論がないことを示すものである。それをうけてMSは，書籍の購入を要求する根拠について説明を始める。「Web版なり作ったり色々，あるし［03］」という発言から，MSが，書籍がWeb版の制作をはじめ様々な場面で有用だということを示そうとしていることがわかる。しかし，その直後の「なんだろな，ん［03］」という発話が示すように，MSは，Web制作以外の書籍の利用場面を挙げることに手間取っているように見える。結果として，MSは，そのような方法での根拠づけを諦め，編集スタッフ全員に喜ばれ，活用されているという事実を加えようと試みている。MSがWeb版制作という根拠づけだけでは不十分だと考えた理由としては，Web版制作が，このプレゼンテーションでの提案事項の一つであり（資料のスライドNo. 9参照），未だにX-magazineの公的なプロジェクトではないということが挙げられる。

ところが，MSは，2つ目の根拠づけでも行き詰まる。MSは，「買えば多分［03］」といったところで発話を中断する。この発話には，「活用される」といった言葉が続くものと思われるが，MSは，そのように続けるかわりに，前回買ってもらった書籍が実はスタッフによって活用されていないのではないかという疑問を表明する。これに対してFNは，「えへへへ［04］」と発言する。これは，笑い声を表す擬音語をあえて発声したものであり，ここでは，せっかく買ってもらった本を実は活用していないという後ろめたさ示すものと考えられる。この発言によって，購入してもらった書籍が実は，あまり利用されていないという共通認識が可視化される。

ここにいたって，MSによる書籍購入の要求は，公的な根拠を失い，MSの個人的な思いの基づく要求として現れてしまう。これに対して，MSは即座に修復をおこなう。MSは，「みんなありがたがって読んでいますって言う［05］」と宣言した上で，「後輩に技術を伝えるために必要だし［05］」と付け加える。前半の部分では，MSは，自分の都合に合わせて現状を歪曲してしまっているが，後半部分では，書籍購入に新たな根拠を付け加えている。それは，後輩達への技術の伝承という根拠である。後輩達への技術の伝承は，X-magazine編集部という組織を維持するために欠かすことのできないものである。このような根拠に立つことで，書籍の購入はX-magazine編集スタッフのコミュニティを維持するための方策として位置づけられ，MSの主張は，MS個人の主張ではなく，X-magazine編集長MSの主張として現れることになる。つまり，主張するMSのアイデンティティを，個人としてのMSではなく，編集長としてのMSとして設定することで，その主張の公共性が確保されるのである。Latour（1987）も指摘するように，主張の公共性の確保は，事実を構成するための重要な要素である。プレゼンテーションの構成場面においても，主張の公共性を確保するためのアイデンティティの調整がなされているといえる。

以上，聴き手の声の想定と対話の過程には，関連する人々の関係調整作業が不可分であることが示された。特筆すべきことは，このような関係調整の中で，プレゼンテーション内で扱われるデータや事実も位置づけを変えるということである。例えば，スライドNo. 3における取材経費のデータは，学生支援課の非難に反撃するための証拠から，共通理解のための材料として位置づけなおされていった。また，スライドNo. 6における技術書は，MSが個人的に欲しいものから，編集長MSが後輩を育成するための教材として位置づけを変えていった。この意味で，ここでおこなわれていた調整は，人と人，人とモノの関係調整であるといってよいだろう。このような人とモノの関係の変化過程は，仮想対話の変遷過程と不可分である。

3.1.5.4　連盟関係と関心の翻訳

ここまでの分析で，プレゼンテーションの構成において社会的ネットワーキングがなされることが示された。すなわち，MSが聴き手の声との仮想的な対話を構成し，それを組み替えていたこと，そして，その過程は，自分を含む関係者との社会的な関係の組み替え過程として見ることができることが明らかとなった。ここでは，そのような社会的関係の組み替えが，どのような方法でなされたのかについて検討する。

断片1の分析で示したように，MSは，自分たちを，無償で学校のために働く善意の人々として位置づけることで，学生支援課の疑いを不当なものにしようとしていた。この時，MSらは，大学の利益という大義名分と連盟関係を作り上げていると考えることができる。本来，「大学の利益」は学生支援課と連盟関係にあるべきものである。すなわち，それは，学生支援課が追求すべきゴールであり，彼らの意志決定の準拠点でもある。しかし，MSらが「大学の利益」と連盟してしまうことで，学生支援課と「大学の利益」との連盟は解除されてしまう。なぜなら，当該の問題を巡ってMSと学生支援課は対立関係にあるからである。MSらが「大学の利益」と連盟することで，彼らを疑い，その作業を邪魔する学生支援課は，「大学の利益」との連盟を解かれるだけでなく，それに反するものとして位置づけられる。このような関係づけの中で学生支援課が「大学の利益」との関係を取り戻すには，MSの主張を受け入れる他はないのである。

断片1では，「大学の利益」という概念との連盟が模索されていた。もちろん，連盟の相手は概念だけではない。以下の断片9では，学長との連盟について言及されている。

断片9

MS：これをもし学長とか上の人に見せた時，学生がこれだけ，何，学校のためとか，動こうとしている流れを学生支援課が塞き止めてるって知ったら，上は何て言うんじゃないんかっていうのが。上に言ったら，どうするの？って。あんた達，あんた達どうするの（打ち合わせ1）

この発言において，MSは，断片1と同様，自分たちを大学のために働くものとして位置づけ，学生支援課を，その善意の活動を邪魔する存在として位置づけている。ここでMSは，自分たちを学長と連盟させることを検討している。学長は「大学の利益」と連盟する者であり，その意味で，この連盟は断片1の分析で示したような，「大学の利益」との連盟のヴァリエーションだといえる。さらに，学長は，学生支援課を管轄し評価する立場にある。原則として学生支援課は学長の意思に従う分掌上の義務がある。「大学の利益」を介してMSが学長と連盟関係を構成するならば，MSの仕事を邪魔する学生支援課は，MSの連盟相手である学長の意思に反することになってしまう。かくして，学生支援課はMSの主張に耳を傾けざるを得なくなるのである。

以上まとめると，第三者との連盟関係を作り出すことは，自分の主張を代弁してくれる人を増やし，説得相手を孤立させるものであった。これは，Latour（1987）が科学者の活動を分析する中で指摘した操作の一つである。MSが断片1，断片9において模索していたのは，このような連盟関係の在り方であった。

スライドNo. 5の構成過程では，別の種類の調整がなされている。スライドNo. 5は，「取材の望ましい形」というタイトルのスライドである。そこでは，まず取材の望ましい形について説明され，そこから，ガソリン代支払い制度が提案されている。断片5からわかるように，ガソリン代の問題について，MSは当初，学生支援課を責め立てるような発言をしているが，その後，スライドづくり場面において，仮想対話の組み直しをおこなう（断片6）。

断片6においてMSは，Latour（1987）が関心の翻訳と呼ぶような操作を行っている。関心の翻訳とは，他者の利害関心を自分の利害関心に同一化させるプロセスである。つまり，ある理論や技術を受け入れることが，聴き手の関心を満たすために避けて通れないルートとなるように，人々や人工物（理論や商品，データ等）の位置づけや関係の在り方を再定義することである。

打ち合わせ1においてガソリン代支払いを要請するMSの関心は，「ガソリン代で自腹を切るのはまっぴらだ」，ということであったと考えられる（断片5参照）。しかし，断片6においてMSは，「X-magazine編集に，自分たち以外の学年，他学部の学生を参加させる」という関心を新たに設定し，そのための条件としてガソリン代の支給制度を位置づけ直している（断片6）。この新たに設定にされた関心は，学生編集スタッフを維持したい，また，大学全体の公式広報誌であるX-magazineの編集には全学部の学生が関与してもらいたい，という学生支援課の関心と重なり合うことなる。このようにMSは，両者の関心を重ね，その共有された関心を達成するために必ず達成すべきポイントとしてガソリン代支給の制度化を位置づけている。Latour（1987）は，これを義務的通過点と呼んだ。「こういうと，向こうも断りにくいかな？」というMSの発話は，この操作が意図的であることを示唆している。ここでは，プレゼンテーションを巡る様々な人々の関係が再編成されているといえる。まず，MSと学生支援課の位置づけが大きく変わる。新たな関心の導入によって，MSは，学生支援課と対立する者（金を出せと強要する者）から，学生支援課と一緒に学生支援課の目標（X-magazineを全学のための広報誌とする）に向かって協働する者となる。関心の翻訳はこのように人々の関係を繋ぎ替える操作である。

スライドNo. 6の構成過程も，関心の翻訳の事例として見ることができる。なぜなら，X-magazine編集部という組織を継続的に維持することは学生支援課の関心でもあり，MSが自身を，後輩の育成を考える編集長として位置づけるのであれば，両者の関心は共有されることになる。そうなれば，MSが要求している「技術書」は，その共有された関心を満たすための手段として位置づけられるのである。

以上まとめると，聴き手の声との仮想対話の構想においては，話し手と聴き手の関係を積極的に繋ぎかえるような操作がなされていた。その操作には，Latourが指摘した連盟関係の構築や関心の翻訳といった作業が含まれていた。Latourは，医学上の発見（Latour 1988）や交通機関デザインの失敗（Latour 1996）といった事例の事後的分析から，そのような結果の背後に，どのような連盟関係の構築や関心の翻訳があったのかを論じているが，本調査では，聴き手の声との対話の在り方を模索する中で，連盟関係の構築や関心の翻訳がシミュレーションとしてなされることが明らかになった。

3.2　調査2：説明型プレゼンテーションの分析

3.2.1　対象と方法

調査2では，工学分野の博士課程の学生による，中間発表のためのプレゼンテーション練習場面を取り上げる。ここでプレゼンテーションされる内容は，新しく提

案する学習手法と，その手法の実践的評価の結果である。

学位論文の中間発表の目的は，その時点までの自分の研究成果を説明し，聴き手である教員からフィードバックを得ることである。このプレゼンテーションは，誰かの態度や意思決定をある方向に動かそうとするものではなく，聴き手が説明を望んでいるものについてさらに深い理解を得られるようにすることである。よって，このプレゼンテーションは，説明型プレゼンテーションに属するものだといえる。

調査の方法は，ビデオ録画による事例観察である。具体的にはプレゼンテーション練習場面にビデオを持ち込み，その様子を録画した。聴衆は，他の学生3名である。練習場面は，口頭発表部分と議論部分からなるが，この調査では，特に議論部分に注目し，その部分のトランスクリプトを作成し，分析する。議論部分において，発表者の意図が語られると同時に，議論をとおして，発表者や聴き手がプレゼンテーションの構成をどのような考えに基づいておこなっているかが示されると考えたからである。

3.2.2　データ

この議論の主なトピックは，自分の研究アプローチと，そこから得られた結果をどうやって説明するかであった。以下に，このトピックに関連するやりとりの事例を示す。

3.2.2.1　事例1

ここでは，結果の提示に際して他のケースとの比較がなされてないことについて議論されている。発表者は，他のケースとの比較ができないことの対策として，今あるデータをより詳しく分析することを挙げる。以下はそれに続く議論である。

参加者1：[01] だからそれを補完するっていうのも，あの，やった実験のデータをいくら詳しく（　）したって，そこからやってないことに関して何もいえないと思う
発表者　：[02] だからやってないことについて言及するんじゃなくって，やってることについて補強するという考え
参加者1：[03] ん，まあ，それはありうる
参加者2：[04] それならありえるんだけど，ただ，やってないこととの比較をもとめられることも多くて
発表者　：[05] ああ，ああ
参加者2：[06] 要するに，いままでのことと，どこが違うって言われて。今までのことやってないのに，何にもいえないよね
発表者　：[07] そうですよね
参加者2：[08] それをつたえ（　）
発表者　：[09] え，だから，（略）やってない場合と，どんくらい違うかとかについては全然強調もしてないし。(略)そこらへんは，はっきりしないとなんか，曖昧なものとしてですね，聞いているほうとしては，そこら辺どうなのかと言いたいと思いますけど（略）
発表者　：[10] だから，やっぱりね，（略）どっかに成績的な要素があるとね（略）こういうことろに効果があるとか（略）
参加者1：[11] 発言内容とか？
発表者　：[12] ああそうか

3.2.2.2　事例2

プレゼンテーションの前半部で出されているデータが，話の流れからみて冗長であるという指摘が参加者よりあった。これ対して発表者はその理由を次のように答える。

発表者　：[01] 個人的なところばっかり焦点をあてると，今度，認知的【注：認知心理学的】な人に結構突っつかれる（略）

また，同様の指摘が再度なされた時には，発表者は次のように答える。

発表者　：[02] あれ【注：量的データで示した結果】が一番(略)スパッと(略)示しやすかったっていうのがあったんで，あれをまあ，持ってきた方が得策だろうということだったんですけど，あれに関していうと実は，おまけ的なところがあって

3.2.2.3　事例3

先行研究の紹介がないことが参加者から指摘されるが，発表者は，先行研究の紹介はしていたと反論する。これに対して参加者1は，そこでは研究方法だけが引用されていて，類似の開発研究の紹介がないことが問題であると指摘する。

参加者1：[01]（略）そういうのは逆に引用した方がいいかなって。あ，この人，勉強しているなっていう印象が

発表者は，以前にこの研究を論文化したときの先行研究紹介が利用できるかもしれないと発言する。しかし，その論文と今回の発表では説明の流れが違うので，発表

の流れを悪くしないために工夫が必要であることを付け加える。それに対して，参加者1，2が次のように発言する。以下のトランスクリプト中，＝は，発話に切れ目がないことを示す。

参加者 2 ：［02］（略）発表の時に，そこまで細かく突っ込んでくることはまずありえないので，ちゃんとやってるって＝
参加者 1 ：［03］＝印象をもたせる。それでいいかも

3.2.2.4　事例4

発表者は，教育現場をフィールドとしながら，実験的手法を取り入れて研究をおこなっているが，フィールドの特性から，実験室的研究をきちんとおこなうことは困難である。発表者は，このことが実験室的アプローチをとる聴き手からの批判を喚起する可能性があると考えている。この問題への対処として，発表者は次のような方策を提示する。

発表者：［01］（略）少なくとも，例えば，×××学会の（　）でいえば，え，特に，その，なんていうんですか，えっと，その実験室的アプローチにガチガチに限定されてやっているような実験ではなくって，フィールドに基づいているような論文がまあ，殆どというか，全部だったので。で，まあ，国際会議の論文をみても，そういう傾向にだんだん移ってるっていうのがよく見えてるんで，実際数をですね，数えてみようかなって。だから，自分に近いような仕事っていう人がどのくらい，パーセントでいるのかなっていうのを，少し，だから，口で言えるように，いってみようかなって

3.2.3　分析と考察

ここでは，上記のデータに基づいて，説明型プレゼンテーションの構成において，社会的ネットワーキング（聴き手の声の想定をとおした社会的ネットワーキング作業）がどのようになされているかを分析する。

3.2.3.1　聴き手の声との対話

事例1で，発表者らは，プレゼンテーションの中で研究結果をどのように聴き手に説明するか話し合っている。その中で，かれらは，従来手法との比較を求める聴き手の声を自らの発言の中に引用し［06］［09後半］，それに答える形で，対処の方法を練っている。参加者2は，［06］の発言で，「いままでのことと，どこが違う」という聴き手の声を引用し，それに対して「やってないのに何にもいえない」という回答を自ら与えている。これに対して，発表者は，「だから，（略）やってない場合と，どんくらい違うかとかについては全然強調もしてないし［09前半］」と発言する。これは，「いままでのことと，どこが違う」という声に対する発表者の現時点の回答だと考えられる。しかし，そのような回答によって聴き手が満足しないことは，発表者自身が理解していたといえる。それは，発表者が，連続する発言の後半［09後半］に，［06］で提示された聴き手の声を再度，形をかえながら引用していることからわかる。ここで，「比較について強調しない」こと以上の対処の必要性が，発表者，参加者らにとって明らかとなる。この中で発表者は，成績的要素（点数のように効果を客観的に示せるデータのことだと思われる）を示すことで提案している学習方法の効果を示すという方針を挙げる［10］。これは，発表者が［02］で言及している「補強」にあたるアイデアであるが，ここでは，その補強の方針が，より明確化している。

「成績的要素」を用いて「補強」おこなう，という明確化された方針は，「いままでのことと，どこが違う」と執拗に問い続ける聴き手の声に対する回答である。ここでなされているのは，聴き手の執拗な声との対話のシミュレーションであり，その結果として，「成績的要素」による補強，というプレゼンテーションのアイデアが提示されている。

3.2.3.2　社会的関係の理解と調整

事例2は，プレゼンテーション内容のバランスに関する議論である。参加者は，プレゼンテーションの前半のデータ提示部分が全体の流れからみて冗長だと指摘する。この指摘は議論の中で，2回にわたってなされている。これに対する発表者の回答［01］からは，発表者が，発表の聴き手の中に，個人的な部分に焦点をあてて論じることを好む人々と，そうでない人々（つまり認知心理学的な人々）が混在しており，それら2種類の聴き手の一方を満足させることが他方の批判を喚起するという排他関係にあることを認識していることが見て取れる。また，回答［02］の「得策」，「おまけ的」という発言からは，プレゼンテーションの前半に取り入れられた量的データが，「認知的な」人々への取りなしとして捉えられていることがわかる。つまり，発表者は，自分の研究結果を説明するにあたって，その説明内容がどのような社会的関係の中に位置づけられるかを把握したうえで，発表が冗長になる危険をあえておかしてでも，「認知的」な聴き手の理解を助けるような情報を盛り込むことを選択したのである。これは高度に政治的な判断である。

事例3においては，先行研究の紹介をプレゼンテーションにどのように入れるかについて議論がなされている。ここで，参加者1は，研究方法だけでなく類似の開発研

究の紹介をすべきであると指摘している。その理由として，参加者1は，「この人，勉強しているなっていう印象［01］」を聴き手に与えることができることを挙げている。発表者は，開発事例の紹介を盛り込むことで発表の流れが悪くなる懸念を表明するが，参加者1，参加者2は，聴き手に，「ちゃんとやってる］［02］」という「印象を持たせ［03］」ることを優先することを勧める。

ここでは，プレゼンテーションの目的に関する二つの解釈が現れている。発表者は，聴き手に対して流れのよい説明をおこなうことが目的だと考えている。これに対して，参加者らは，このプレゼンテーションの目的を，発表者がきちんと勉強していることを聴き手に伝えることだと考えている。この解釈の違いは，発表者と聴き手の関係の把握の違いによるものである。発表者は，ここでは，自分と聴き手を，「説明する者と，説明を受ける者」の関係において捉えている。そのような把握にたてば，プレゼンテーションの流れを悪くするような情報を入れることには慎重にならざるを得ない。これに対して参加者は，それとは違う関係把握に基づいて発言している。それは，発表者と聴き手を，「生徒と教師」として関係づけるものである。このような関係把握にたった時，プレゼンテーションの目的は教師からポジティブな評価を引き出すこととなる。よって，発表者が「ちゃんとやって」おり，きちんと「勉強している」ことを教師に示すことができる先行開発事例の紹介は，プレゼンテーションの流れの悪さを多少犠牲にしてでも，取り入れる価値のあるものとして捉えられることになる。ここで，先行開発事例に関する情報は，研究成果の説明のための一要素から，発表者が「ちゃんと－勉強している」ことを教師に対して示すための道具として位置づけをかえることになる。先行開発事例をプレゼンテーションに取り入れるか否かという問題は，発表者と聴き手の社会関係の問題として議論されていたといえる。

3.2.3.3　連盟関係

事例4において発表者は，自分の研究アプローチを聴き手に説明するための手法として，国際学会の発表や，学会論文誌の中で自分と同じアプローチをとっている論文（研究者）の数を提示することを挙げている。これは，Latourが連盟関係の構築と呼ぶ方略である。ここで発表者が連盟を組もうとしているのは，国際学会の発表や，学会論文誌の中に現れた自分と同じアプローチを採用している研究（研究者）である。このような連盟関係を構成することで，聴き手が，発表者の研究を，少なくともその研究アプローチ故に否定することは困難となる。そうするためには，聴き手は，多くの査読者達が認めた複数の研究が採用しているアプローチを否定しなくてはならないからである。このような連盟関係を構築することで，発表者は，一人で聴き手に対峙するのではなく，多くの他の研究者と査読者を背景にして聴き手に向かうことになる。これは，査読システムを信頼するという学術コミュニティの約束事を介して，発表者と聴き手の連盟関係を構築することでもある。ここでなされているのは，発表者と聴き手の関係の在り方を変更する作業だといえる。

4．まとめ

調査1から，プレゼンテーションの構成が，社会的ネットワーキングの過程であることが明らかになった。以下に，この調査から得られた知見をまとめる。

a）説得的プレゼンテーションの構成過程において，聴き手との仮想対話がなされる。
b）仮想対話は対話のシミュレーションとでも呼ぶべき，動的で柔軟な対話の組み替え作業をとおして構成・再構成される。
c）対話のシミュレーションは，関連する人々の社会的関係の把握と不可分な形でなされる。
d）Latourが指摘した連盟関係の構築や関心の翻訳といった社会的･政治的調整作業が，対話のシミュレーションの中でなされる。
e）対話シミュレーションを進行させる契機として，振り返りや議論が重要である。

調査2からは，研究成果を聴き手に伝えることを目的とする説明型プレゼンテーションの構成においても，説得型プレゼンテーションと同様の社会的ネットワーキング作業がおこなわれていることが示された。

プリブルら（2004）は，プレゼンテーションの種類として，さらに情報提供型を挙げている。単に事実だけを示すような情報提供型プレゼンテーションの準備において，調査1，2でみられたような社会的ネットワーキングが見られるか否かについては今後の課題とし，慎重に考える必要があるだろう。

今回の調査からは，プレゼンテーションの生成的性質も明らかになった。プレゼンテーションとは対話のシミュレーションという動的な仮想対話の組み替え作業をとおして，伝えるべきアイデアの位置づけをも再定義していくような過程であった。つまり，伝えるべき内容は，プレゼンテーションの準備過程をとおしてつくられるものであった。この知見は，プレゼンテーションの準備を，「もともと頭の中にあったアイデアを伝える活動」として捉える従来のプレゼンテーション観に対する反例となっている。

また，調査からは，多くのプレゼンテーションの教科書（例えば，Goodlad 1996，プリブル 2004など）が推奨する「聴き手分析」が不十分であることが示唆された。

ここで「聴き手分析」とは，プレゼンテーションに先立って，「聴き手」が誰であり，どのような背景や価値を持っているかを分析し，その結果をアイデアの表現や口頭発表に活かそうという主旨のものである。

調査1，2からは，プレゼンテーションの構成過程に，話し手や聴き手のアイデンティティの調整を組み込まれていることが示されている。話し手が何者であり，聴き手が何者であるかは，プレゼンテーションの構成過程の中で模索されつづけた。そして，このような模索の過程こそが，プレゼンテーションの計画過程そのものであった。つまり，聴き手は，素朴に実在するものではなく，計画の過程において社会的に構成されるものだといえる。

例えば，この調査1におけるMSのプレゼンテーションの改善は，聴き手である学生支援課に関する理解を更新していく過程としてみることができる。しかし，それは，様々な誤解を取り払い，最後に，どこかに存在している「本当の学生支援課」の姿に到達するような過程ではなかった。学生支援課の位置は，絶えず相対的であった。学生支援課は，プレゼンテーション構成過程の中でMSら学生や「取材費のデータ」といったモノとの関係づけの中に取り込まれ，その関係の中で絶えず位置づけを変えていった。調査2のおいても，学位論文中間発表の聴き手の位置づけは，発表者，議論参加者，査読者，プレゼンテーションに取り入れるデータや説明との関係づけの中に取り込まれることで，変化していた。どちらのケースにおいても，このような関係の在り方を組み替えることがプレゼンテーションの構成過程そのものであった。以上より，聴き手分析について新しい視点が提供される。まず，聴き手の分析は，関係の分析であるという点，そして，聴き手は，関係の変化の中で絶えず位置づけを変えるものだという点である。

5．おわりに

以上，説得型と説明型のプレゼンテーションの構成場面の観察をとおして，プレゼンテーションの構成作業における社会的ネットワーキングの様態を明らかにした。

従来のプレゼンテーション教育の研究は，アイデアの論理的表現（林・井上・橋本 2003，牧野・永野 1997，林 2002），アイデアの視覚的表現（大西 1995，栗原 2006），口頭発表の領域に関するもの（谷口・林 2002，大倉 2001）の領域に属すものが殆どであり，社会的ネットワーキング作業を取り扱っている研究は存在しない。この意味では，本研究はプレゼンテーション教育に新たな領域を追加する可能性を持つといえる。

今後，この調査によって得た知見に基づいて，プレゼンテーション教育の手法について提案する予定である。その詳細を詰めるのは今後の課題であるが，現時点では，対話のシミュレーションを柔軟におこなうための支援，また，聴き手の声の想定を促進するための関係把握支援等が必要になると考えている。

付　記

本研究の一部は，平成17-19年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(1)No. 17300260　代表：鈴木栄幸）の支援をうけている。

引用文献

Bakhtin, M.（1986）. Speech genres and other late essays. In C. Emerson and M. Holquist（Ed）, trans. V.W. M. Austin: University of Texas Press.（新谷敬三郎他訳（1998），ことば対話テキスト（ミハイル・バフチン著作集8），新時代社）

Denzin, N. & Lincoln, Y.S.（2000）. Handbook of qualittive research, second edition. Sage Publications

Goodlad, C.（1996）. Speaking Technically. Imperial College Press

林　徳治・井上史子・橋本恵子（2003）．強制連結法による論理的思考力の育成をはかる授業実践　日本教育工学会大会講演論文集，Vol. 19，No. 1，157-158

林　徳治・真下知子（2002）．プレゼンテーション技術の向上を図る教員研修プログラムの開発と評価教育情報研究，Vol. 17，No. 4，pp.11-21

栗原裕一（2006）．国語科メディア表現能力を育成するための学習指導法とカリキュラムの開発　茨城大学教育実践研究，No. 25，323-337

Latour, B.（1987）. Science in action: how to follow scientists and engineers through society. Harvard University Press.（川崎勝他訳（1999），科学が作られているとき　産業図書）

Latour, B.（1988）. Pasteurization of France. Harvard University Press: Cambridge, MA, USA

Latour, B.（1996）. Aramis or the love of technology. Harvard University Press, Cambridge MA, USA

牧野由香里・永野和男（1997）．情報教育の観点からとらえたコミュニケーション・スキル育成のための演習コースの開発：Speech Constructionにおける論理的分析力・構成力　静岡大学情報学研究，Vol. 3，66-86

Merriam, Sharan B.（1998）. Qualitative research and case study applications in education. Jossey-Bass. S.B.（堀　薫夫，久保真人，成島美弥訳（2004），質的調査法入門－教育における調査法とケース・スタディ，ミネルヴァ書房）

大西慶一・平林宏朗（1994）．プレゼンテーション能力の育成についての考察：プレゼンテーションカリキュラム案　日本教育情報学会，No. 10，20-21

大倉孝昭（2001）．協調型プレゼンテーション学習システム by“SMILE for ME”情報教育方法研究，Vol. 4，No. 1，pp.13-15

プリブルチャールズ・坂本正裕（2004）．現代プレゼンテーション正攻法　ナカニシヤ書房

菅井勝雄，山城新吾（2001）．大学におけるプレゼンテーション能力の育成　－情報教育の観点から　サイバーメディアフォーラム2号（大阪大学サイバーメディアセンター），

pp.5-8
谷口由美子・林　徳治（2002）．プレゼンテーション技術の向上を図る訓練プログラムの実践と評価：東洋医学専門学校教員養成学科での授業実践を通して　日本教育情報学会年会論文集，No. 18，282-285
鵜木　毅（2000）．情報化社会に対応する総合学習：情報分析・プレゼンテーション能力の育成を目指して中等教育研究紀要（広島大学），Vol. 40，31-36
Voloshinov, V.N.（1973）. Marxism and the philosophy of language, trans. L. Matejka and I.R. Titunik, Seminar Press
Wertsch, J.V.（1991）. Voice of mind: A sociocultural approach to mediated action. Harvard Univeristy Press.（田島信元他訳（1995），心の声　－媒介された行為への社会文化的アプローチ－　福村出版）
Wertsch, J.V.（1998）. Mind as action. Oxford Univeristy Press.（佐藤公治他訳（2002），行為としての心　北大路出版）

鈴木（すずき）　栄幸（ひでゆき）
1988年慶應義塾大学大学院社会学研究科（心理学専攻）修士課程修了。同年日本電気株式会社入社，2000年茨城大学人文学部助教授，2007年同学部教授（現在に至る）
コンピュータを利用した協同学習環境のデザイン実践，理論研究に従事。
日本教育工学会，日本科学教育学会，日本認知科学会，電子情報通信学会，情報処理学会，各会員。

加藤（かとう）　浩（ひろし）
昭58慶應大大学院工学研究科修士課程了。同年日本電気入社。平11東京工業大社会理工学研究科博士課程了。博士（工学）。平12メディア教育開発センター助教授。平12東京工業大大学院社会理工学研究科助教授連携併任。平13総研大文化科学研究科助教授併任。現在，メディア教育開発センター教授，及び総研大文化科学研究科教授併任。教育工学の研究に従事。
日本教育工学会，日本科学教育学会，情報処理学会，電子情報通信学会，日本認知科学会，ヒューマンインタフェース学会，日本テスト学会，American Educational Research Association 各会員。

Case study on the process of dialogic constitution of presentation

Hideyuki Suzuki[1)2)]・Hiroshi Kato[2)3)]

This paper discusses how people form presentations from the theoretical perspective of Bakhtin and Latour. For the purpose, we observe two cases; one is preparation process of persuasive presentation, the other explanatory presentation. The observations revealed that; (1) presentations are formed through envisioning the voices of related people and then virtually conversing with the voices, (2) grasping the social network in which the related actors (including themselves) is the foundation on which the voices are envisioned. (3) during the virtual conversation, people try to reconfigure network of the related people as to support their argument. Applying these results to propose methods for presentation education is our future work.

Keywords
Presentation, Theory of dialogue, Multivoicedness, Actor-network

[1)] Faculty of Humanities, Ibaraki University
[2)] School of Cultural Sciences, The Graduate University for Advanced Studies
[3)] National Institute of Multimedia Education

資料：口頭発表練習におけるプレゼンテーション内容

No.	スライドタイトル	口頭発表内容（縮約）
1	学生支援課の皆さん 聞いてください！	新しく活動係になってくれたTDさんは，前の係長と違って親身になって考えてくれてるような気がする。だから，今の時点で，X-magazineのメンバーがどんな事を考えて，どんな事で困ってて，どんな風にX-magazineをしていきたいって思っているのかを1回聞いてもらいたい。
2	プレゼンの流れ	取材経費で困ってる事，制作段階で困ってる事，制作メンバーがどんな意識でやってるか，X-magazineをどのように良くしていきたいか，を話して，まとめる。
3	困っています！取材経費	今までいろいろなものを買っていただき，お金もだしてもらった。しかし，自分たちは，今まで何にいくらかかったか伝えてこなかった。そこに自分たちも問題があったと思うので，それを，を明らかにする。この見開き2ページの企画では，取材費には5100円かかっている。距離数未確認だが，これにガソリン代が加わる。
4	取材の流れ	どうやって取材をするか説明する。（それぞれの記事の）企画者が，自分のページに最後まで責任を持つ。企画者は，取材協力，カメラ担当，車を出しを依頼する。かかった5100円は，企画者が，取材費が（学生支援課から）出るまで，1ヶ月くらい肩代わりした。（移動で使った）高速代は請求できている。しかし，ちょこちょこした取材のガソリン代は，距離数をいえばその分のお金を出していただけるという制度がないので，無かったものとして済まされている。このようにして取材が終わると，ページ責任者はページ制作レイアウトにかかっていく。
5	取材の望ましい形	取材は必ず二人以上でいく。一番整えておきたいのは，企画者が他のメンバーに協力依頼しやすい環境。今，ガソリン代が出ないので，「車出して」とい言いづらい。今は，気心の知れている同じ学科の3年生が中心メンバーなのでなんとかなる。今後，他学部の学生もメンバーにして大きな組織としていきたいと思っている。取材経費を事前に。取材費を1ヶ月間肩代わりする状況では，取材に消極的になる。組織が大きくなった時に制度（注：取材費支払いの制度）がないと辛い。
6	困っています！制作段階	まず，学生支援課指定ページ（注：オフィシャル情報のページ。必ず確保される）について学生支援課が親身でない。自分たちもきちんと考えて欲しい。次に，インク，紙，CD-Rの支給をお願いしたい。次に，公用車（注：大学所有の自動車。教職員が運転する必要がある）のこと。ほとんど取材日が土日や休日なので，教職員に頼みにくい走行距離数と支払った高速代を報告するので，かかった分だけの交通費は支給して欲しい。次に，MS-Officeの購入。次に，故障パソコン修理をお願いしたい。次に，DTP関連書籍購入。前回10数冊の技術書を買ってもらった。これらの本は人気も高い。また，後世代に技術を伝えるのにも必要。まだ不足しているので購入していただけるとありがたい。
7	いい物を作りたい！	制作メンバーの意識について話す。ほんとに良いものをつくりたいと思ってやっている。睡眠，長期休業，バイト，テスト，レポートを犠牲にしている。締め切り時期には，部屋に泊まり込む状態。公式なものをつくらせていただいてるって事にすごい誇りを持っている。だからこそ責任を持って最後までやり遂げようとしている。
8	先生達に聞きました！	自分たちの活動を見てくれてる人の声を紹介する。S会館（X-magazine編集室のある建物）の事務室の皆さんは，「ハードによくがんばっている，今回はすぐ，えー，配布したものが無くなったし，努力が報われてとても良かった。」といっている。編集委員の先生方は，「クオリティーも認知度も上がってきているんではないか」，また「X-magazine制作は教育効果も高い。こういう学生がつくる学校の文化を後世にも残したい」といっている。
9	Web版X-magazineを 作りたい！	X-magazineの将来構想についていいたい。Web版X-magazineを制作してもっと多くの人の目にX-magazineをX大学を知ってもらいたい。Web版なら印刷部数を増やさずプロモーション活動ができる。
10	地域の人にも配りたい！	地域の人にも配りたい。地域の学校や企業に配ってX大学に少しでも興味を持ってもらいたい。地域の高校や中学校ではX大学は「しょっぱい大学」（注：格好悪い大学）だと思われてるが，X大ってこんな雰囲気なんだというのを伝えたい。地域企業には広告掲載でスポンサーになってもらいたい。これをきっかけに地域産業との結びつきをつくりたい。，A県にX大学ありと言わせるぐらいにプロモーションが，今のX大には出来ていない。そのプロモーション活動のためにX-magazineを使いたい。
11	まとめ	学生支援課と学生で意思疎通，情報共有をしたい。今まで，こちらにも悪い点があった。金くれ金くれと要求しただけだった。こちらからの情報公開が足りなかったので，改善する。日程が合えば会議に来てほしい。自分たちの学年が関われるのはこれが最後。後輩のために，良い環境と制度を残したい。前回からこのような事を言い続けているが，先延ばしにされてきた。TDさんは，今までの職員とは違うと思う。是非前向きに検討して欲しい。